SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

ヘーゲル「宗教哲学」研究の新段階：旧版の問題点と国際共同編集版の意義

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-01-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山﨑, 純 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00024388

ヘーゲル「宗教哲学」研究の新段階

――旧版の問題点と国際共同編集版の意義――

山崎　純

一　「宗教哲学」開講の背景

青年時代から宗教を中心テーマとしてきたにもかかわらず、ヘーゲルが大学の学科として宗教哲学を担当したのは、意外にも非常に遅かった。イェーナでもハイデルベルクでもやらなかった。ベルリンでも初めのうちは講義せず、着任二年半後の一八二一年夏学期に初めて「宗教哲学」を開講した。イェーナでアカデミックな活動を開始してから、実に二〇年もたってからだった。どうして宗教哲学が講義の対象になるのがこんなに遅くなったのであろうか。それは宗教哲学が一八世紀の終わりにやっと独立した学科として構成され、当時大学の学科として導入されたばかりであったからだ(V.3.X)。

哲学が神を対象とするときは、「合理神学（theologia rationalis)」とか「自然神学（theologia naturalis)」という学科があてられた。これはヴォルフ以来の習慣である。彼の学徒バウムガルテンも、バウムガルテンの『形而上学』（一七

三九年）をテキストに用いたカントの場合もそうであった。カントは一九世紀後半に少なくとも四九回にわたって形而上学を講義した。[1] ペーリッツの編集した『イマヌエル・カントの形而上学講義』によれば、一　存在論、二　宇宙論、三　心理学に続いて、四　合理的神学（Die rationale Theologie）が配されていた。[2] 十九世紀に入る頃になって、やっと大学の講義名に「宗教理論（theoria religionis）」や「宗教哲学（philosophia religionis）」というタイトルが登場してくる。ヘーゲルが講義した「宗教哲学」はけっして確立された学科ではなかった。むしろ彼の講義は、産声をあげたばかりのこの学科が、自立した学科として確立される重要な一歩として寄与したのである（V.3.X）。

突然の開講決定？

一八二〇年五月五日のベルリン大学総長宛書簡のなかでも、宗教哲学はまだ独立した学科としてあげられてはいない。「精神哲学」の枠内で、「人間学と心理学」と「美学」のみがあげられており、宗教哲学は「美学」と結びつけられているだけである。[3] ところが、翌年四月三〇日には「宗教哲学」が開講されているのである。この間の或る時点で、「宗教哲学」を独立の学科として開講する決断がなされたことになる。開講を予告する必要があったことから、遅くとも一八二〇年の年末頃にこの決定がなされたと推測される（GW.17.353）。

いったい何がそうさせたのか。ここには同僚にしてライバルのシュライエルマッハーとの競い合いがあった。一八二一年の夏にシュライエルマッハーの『キリスト教信仰』（以下『信仰論』と略記）の第一巻が出版される。この出版計画がヘーゲルに急な決断を迫ったふしがある。ヘーゲルが実際に『信仰論』を入手できたのは七月前半頃と推定されている。[4] 二人の直接的なコンタクトはなかったが、いずれの講義にも顔を出していた学生は多くいた。実際、ヘーゲルの「講義を聴いている若い連中が、シュライエルマッハーを聴講している連中と激しく争っている」という報告がある（一八二〇年

一月二二日付ターデンからヘーゲルへの書簡 Br.2.223)。彼らからヘーゲルはシュライエルマッハーの構想の基本や出版計画について聞いていた可能性がある。さらに、両者と親しかった神学部のマールハイネケや、シュライエルマッハーの思想に親しみながらヘーゲルとも仲の良かったカール・ダウプからも同様の情報がもたらされたであろう。デ・ヴェッテやフリースとシュライエルマッハーとの連携も、彼の立場を知る手がかりになったであろう(E.1.3)。ヘーゲルはすでに出版前から『信仰論』との対決の必要を感じ、「宗教哲学」講義によってこの対決を開始しようと決意したようだ。したがって彼の講義は『信仰論』の影響史の、最初の、しかも誕生前の日付をもつものであった。[5] 開講後まもない五月九日にヘーゲルは、ダウプ宛にこう書いている。

「いま宗教哲学を講義しているから、とりわけ貴兄の『教義学』が待ち遠しい。聞くところによると、シュライエルマッハーも現在同じように教義学を印刷中だそうです。或る風刺詩を思いつきます。〝おはじき(計算用の模造貨幣)でしばらくは払うことができても、いつかは〔本物の〕財布をひっぱり出さなければならない。〟この財布から模造貨幣しか出ないのかどうかを見てみなければなりません」(Br.2.262)。

また『信仰論』出版翌年の四月四日のヒンリックス宛書簡は、『信仰論』の「第一部が福音合同教会の教義学なのかどうか、はっきりした説明をダウプに期待しています」と述べている(Br.2.303)。シュライエルマッハーとの論争は、たんに私的なライバル意識からのものではなく、プロイセン福音合同教会の神学的基礎をめぐる宗教政策上の対決であった。したがって「宗教哲学」講義はたんにアカデミックな哲学・神学論争にとどまらず、宗教政策論争の性格をも持っている[6](V.3. XII)。

いずれにしても、ヘーゲルは「宗教哲学」の開講をあわただしく決断し、十分な準備のないまま講義に臨まざるを得なかったようである。この点で、講義用のテキスト(Kompendium 綱要)をすでにもっていた他の講義とは事情を全く

異にしていた。例えば、「論理学と形而上学」講義に対しては、ベルリン期以前にすでに3巻本の『大論理学』を完成させていた。「人間学と心理学」や「自然哲学」に対しては、すでにハイデルベルクで『エンツュクロペディー』が出版されていた。「自然法と国家学」に対しては、『法（権利）の哲学』が一八二一年に出版された。これらの学科は、ベルリン時代の初めにすでにかなりの完成度に達していたのである。教授も学生も同一の網要を手元においた講義では、当然のことながら初めから終わりまで、一貫した構成の下に規格化されていて、網要への参照によって、一たび作られた構想からの大きな逸脱は許されない。これに対して、「宗教哲学」は「世界史の哲学」、「哲学史」、「美学」などとならんで、網要をもたない「草稿に基づく講義（Manuskriptvorlesugen）」であった。「網要に基づく講義（Kompendiumvorlesungen）」とはちがって、講義草稿をたえず彫琢し、基本構成の改変から細部の修正まで、フリーハンドが与えられる（V.3.XⅢ－XIV）。

もともと宗教はヘーゲルの中心テーマの一つである。青年期にまず宗教についての思索から彼の哲学的探求が開始されたことはよく知られている。或る意味ではもっとも手馴れた分野である。しかし、ヘーゲルは大学で宗教一般をあつかったことは一度もなかった。『精神現象学』や『エンツュクロペディー』の枠内で部分的にあつかったことはあっても、「宗教哲学」をアカデミックな学科として体系的に論じるのは初めてであった。第三部のキリスト教についての講述には、青年期以来の年季がさすがにものを言って、それなりの基礎をもって臨むことができた。しかし「第一部　宗教の概念」では、そもそも宗教哲学をどう叙述しうるかという問題に初めて本格的に立ち向かうことになった。ここでヘーゲルはかなり苦労したようである。宗教哲学の体系的構成の基本が獲得されたのは、ようやく三回目の一八二七年のことであった。この間に、基本的な叙述原理をめぐって根本的な変更さえ生じている。第二部の宗教史、第三部のキリスト教の叙述においても、編成原理にまで及ぶ少なからぬ変更が生じている。このことは、各学期毎の姿を初めて再現した国際共同編集版

（イェシュケ版[7]　一九八三〜八五年）によってようやく知られるところとなった。旧版の編者たち（マールハイネケ、バウアー、ラッソン）はいずれもこの差を無視して「一つの本」（マールハイネケの序文　W1.11.XIV）を編もうとした。このため、ヘーゲルの最も手馴れた宗教という領域において、円熟したベルリン時代になってもなお軽視できない思想的展開があったという事実がおおいかくされてしまったのである。ヘーゲルの宗教思想の研究は、イェシュケ版にもとづく発展史研究が必要な段階に入ったと言える。イェシュケ版の成り立ちと意義（四）を理解するため、まず宗教哲学講義の資料状況（二）と旧版の成り立ちと性格（三）から見ていくことにする。[8]

二　「宗教哲学」講義についての資料

資料は次のグループに分けられる。

A　ヘーゲルの自筆草稿
- 1　自筆の講義草稿（Das Manuskript. Ms と略記）
- 2　「完成稿の大きな束」（Das Convolut. Co と略記）
- 3　宗教哲学に関する紙片

B　聴講生による講義録

C　旧版に編入されたのち失われたため、旧版によってしか知りえない二次的伝承資料

A—1　Ms

「宗教—哲学　一八二一年四月三〇日開講　同年八月二五日閉講」というヘーゲル自身によるタイトルをもった草稿で、

現在もベルリンのプロイセン文化財国立図書館に所蔵されている。保存状態は良好で欠落もなく、ほぼ完全な状態だそうである。

この草稿は、基本的には一八二一年講義のための原稿である。五箇所に日付が入っている（六月二九日、七月二三日、七月二七日、八月八日、八月一七日）。これが執筆時の日付か、その部分を講義した日付かははっきりしない。草稿全体はおそらく学期が始まる少し前から書き始められ、学期中に終わりまで達したと思われる。イエシュケは執筆時期を前の冬学期の終了（三月二五日）後から講義終了（八月二五日）一週間前まで、つまり一八二一年三月末から八月中旬と推定している（GW.17.353ff.）。開講の決断があわただしかったこともあって、初年度の講義はかなりの〝自転車操業〟だったようだ。

イルティング版の巻末にのっている草稿の写真でもわかるように、本文のわきの余白におびただしい書き込みがなされている。これらの欄外追記はいつ書かれたものであろうか。イエシュケによれば、その大部分は二一年の草稿執筆時の追補・修正であるが、のちの講義にこの草稿を用いたときの書き込みも含まれているという。例えば草稿の58aページにゲーテの『形態学』第二巻への参照指示がある（V.4.93）。この巻は一八二三年に刊行されたものであるから、この書き込みは二四年の講義のときのものであり、そのことは二四年のグリースハイムの講義筆記によっても裏付けられる（V.4.387）。二七年には冒頭の挨拶の所で、この草稿を改作して用いた跡がある（V.3.3 と61を比較）。三一年には、第三部の冒頭に改作の跡があり（V.5.1と279を比較）、ギリシア宗教のところでも、一八二九年刊行のロベックの本を示唆する記述も見られる（V.4.84と391を比較）。

したがって、基本的には一八二一年三月〜八月の五ケ月間で書かれたが、十年間にわたって修正加筆が続けられ、現在の姿になった。ただし、後の学期での追記の範囲はごく狭いものであるとイエシュケは推測する。とくに「第一部　宗教

の概念」は構想そのものが激しく変化してしまったため、もはや二一年草稿の骨格を二七年以降は用いることができなかったと思われる。しかも、マールハイネケが報告しているように、ヘーゲルは二七年には二四年時のグリースハイムの筆記録を、三一年には二七年時のマイヤーの筆記録を使用した（W1.11.XI－XII）。すでに古くなった構想を含む二一年草稿よりも、こちらの方が改作には好都合だったはずである。したがって、第一部については、後の年度の書き込みは少なく、序論と第二部、第三部については、構成の変化がそれほどでもなかったため、後の改作がある程度あるかもしれないと推測される（GW.17.358f.）。

A－2　失われた「完成稿の束（Co）」

この草稿群は、マールハイネケが第二版序のなかで言及しているように、第二版の編集に使用されたが、のちに失われ伝えられていない。イルティングは、マールハイネケがこれを一八二一年のものと「明言」していると受けとった。イエシュケはこれを「根拠がない」としりぞけている。[9] これは、テキスト編集上、決定的な意味をもつことになるため（後述三4（2））、マールハイネケの言葉を前後を含めて引用する。

「増補という点では、第一版ではほとんど使用されなかった一八二一年の講義についてフォン・ヘニング氏の立派に整えられたノートを利用することによって、そしてヘーゲル自筆の遺稿によってさらに多くの新しいことを付け加えることができた。この遺稿のなかには、ヘーゲルが講義のために準備した完成稿のかなり大きな一束がある。このなかには最も難解で最も詳細な論述が含まれていて、そのいくつかはほとんど完全に近く、多くは全く完全な形で含まれていた。それだけではなく、今回は、範囲の上では完全で内容の上ではしばしば断片的な文章や語句だけからなる最初の草案を利用した。この草案は第一版の印刷終了後、当地〔ベルリン〕の王立図書館〔現在のプロイセン文化財

国立図書館〕に保管されていたものである」（W2.11.Ⅶ. 邦訳、上巻九頁）。

つまり二版の増補に利用されたのは、

（1）一八二一年講義のヘニング（He）による筆記録と

（2）ヘーゲル自筆の遺稿 ｛（a）「完成稿の大きな束」（Co）と
（b）最初の（一八二一年の）草案（Ms）である

と読める。

これをイルティングは何を勘違いしたのか、次のように読んだ。増補のために、初版でほとんど用いられなかった一八二一年の講義に関する資料を利用した。そのなかには

（1）ヘニングのノート（He）と

（2）ヘーゲル自筆の遺稿 ｛（a）「完成稿の大きな束」（Co）と
（b）最初の草案（Ms）とがある。

つまり、これらの資料全体が一八二一年のものだと読んだ。しかし、どう読んでも「完成稿の束」が一八二一年のものだと「はっきり明言されていた」（II.744）とはとても読めない。これはイルティングの完全な誤読であった。この束のなかにはおそらくさまざまな時期の草稿が含まれていたであろう。イエシュケは二一年のものはあっても、むしろわずかであろうと推測する。二一年についてはすでに上述の草稿（Ms）がある。これについての改作は欄外への追補や削除修正という形で、元の紙片の上ですでになされている。この原稿の執筆そのものが〝自転車操業〟だったことからして、これ以外に別の草稿を作る余裕があったとは考えにくい。しかも、後の年度の「宗教哲学」はしだいに二一年草稿の線からそれていった。二七、三一年には、もはや二一年草稿を講義全体の基礎におけない所まで構想が変わった。元の草稿にかわ

る新しい講義原稿が、後の講義の基礎におかれた可能性は高い。イエシュケはこの「束」がもっぱら後の講義のための原稿を含む、と推測している（V.3.XXVII－XXIX）。

A－3　「宗教哲学に関する紙片（Blätter zur Religionsphilosophie）」

これは、ローマとギリシアの宗教およびキリスト教について、キーワードを中心に書きつけた覚書である。

ローゼンクランツがまず初めに、この「紙片」の一部（Nr. 155）をニュルンベルク時代の「エンツュクロペディー」二〇七節の「補遺」として編入し公表した。[10] 彼はこれを「見事な解説」[11]と評価しているが、これを「見事な解説」に仕立てあげたのは、ローゼンクランツ自身であった。「紙片」155とこの「補遺」とを比較してみたら、誰でもローゼンクランツの類まれな〝創作力〟に驚嘆するであろう。「紙片」の方はほとんどキーワードの羅列だけである。ローゼンクランツはこのなかから二割程度の単語を拾って、それを見事な文章に仕立てあげているのである。キーワードの幾つかはヘーゲルのものであっても、全体としてはローゼンクランツの創作にほかならない。「上級クラスのための哲学的エンツュクロペディー」の元のテキストには、宗教については二〇七節のたった六行分のごく短い記述しかなかった。ローゼンクランツはヘーゲルにとって重要なテーマであるはずの宗教にしてはあまりに内容が乏しすぎると感じた。そこで彼は入手した一枚の紙片をもとに大胆な創作を行ったのだ。彼が「紙片」の一枚だけをどういう経路で入手したかは不明である。また、これをニュルンベルク時代の作品に結びつけた根拠も明らかでない。いずれにしても、今日明らかになった「紙片」のオリジナルな状態と二〇七節の「補遺」との比較は、かれの編集への疑問をかき立てずにはおかない。他の「補遺」についてもテキストクリティークが必要のようである。

次にH・シュナイダーが、ハーヴァード大学ホートン図書館に保管されているこの「紙片」を改めて解読編集し、初め

てその全体を公表した。[12] そのテーマと内容が一八二一年のMsに対応することから、講義のためのメモか、あるいは学生に講義中に書き取らせるためのテキスト（Diktattexte）であろうと、シュナイダーは考えた。この紙片の外観は比較的すっきりしている。おびただしい削除・修正・追記におおわれているMsにくらべ、「紙片」の方がより良く整理されていて成熟度も高いという「印象」をシュナイダーはもった。そこで、これをMs執筆後にその内容をメモ風に整理したものであろうと考えた。さらにオランダに関する記述がある（155a）ことから、執筆時期を、ヘーゲルのオランダ旅行後の一八二二年末から一八二四年の「宗教哲学」開講の間と推定した。シュナイダーは「紙片」とMsとの内容的構成の比較を十分やらずに、「削除や配置換えが非常に少ない」といった外見的な「印象」だけで判断したようである。[13]

イルティングがこれを批判した。「抹消や配置換えの数が問題なのではなく、二つのテキストの論理的構造こそが決定的な問題なのだ」。内容的な成熟度はMsの方がはるかに進んでいる。「紙片」はただテーマを次々に並べただけだ。それゆえ、「紙片」の方こそMsの準備段階だとイルティングは主張する（II.748f.）。「オランダ」云々もシュナイダーの誤読に基づくことを指摘している（II.751.Anm.14）。

さらに彼は、「紙片」の或る欄外に記された奇妙な日付計算の謎解きをすることによって、「紙片」の執筆時期、さらには一八二一年度講義の進捗状況についての興味深い推理を行った。その日付けとは「紙片」165aの上部余白にある

24
16en　16
7 en　8

これを日本風に表記すると

24
7/16 — 8/16

というものである。この奇妙な日付にシュナイダーは全くお手上げだった。授業終了日は8月25日なのに、なぜ8月16日なのか？そもそも「なぜ二つの日付があるのか？」、「なぜ7月16日なのか？」、「24は一八二四年を意味するのか？」――すべては？であった。[14]

イルティングはこれを次のように解読した。ヘーゲルは学期の三分の二を過ぎた「7月16日」の時点で、残りの授業回数を計算し、今後の予定を立てようとした。この頃、講義はようやくギリシア宗教のあたりに達していたにすぎなかった。まだローマの宗教とさらに「第三部　完成された宗教」を丸まる残していた。「宗教哲学」は、週四回（月、火、木、金のいずれも一六時から一七時まで）講義されていた。[15] このペースでは、とても内容を消化しきれない。そこで補講を入れて週六回（つまり月曜から金曜までの毎日）講義をするとして、「7月16日」から1ケ月後の「8月16日」まで四週間で「24」回になる。この計算を行ったのだとイルティングは推理した（II.749ff.）。目の覚めるような見事な推理である。

イエシュケはイルティングの説を基本的に支持している。しかし、いくつか腑に落ちない点をあげている。この夏学期の終了日は8月25日であって、「8月16日」ではない。この点についてイルティングは、この計算をした時ヘーゲルは前年度の終了日（8月16日）と勘違いしていた、と推理した（II.750）。これに対してイエシュケは、ヘーゲルが七月中旬の時点で学期の終了日を誤解していたなどということは考えにくい、としている。またこの間に24回の授業をこなすには、週六回は必要なく、週五回でいい。これらの疑問点はあるが、いずれにしても、ヘーゲルはこの時点でそのような計算を行い、残りの内容を消化するには、通常の週四回では足りず、週五回の授業が必要であることに気づいた。これは多分そうであろうとイエシュケも認める。この日付計算が記された頁の見出し“Missston endigen”（V.5.302）は、Ms の末尾近くにある“Mit EINEM MISSTON endigen”（不協和音で終わる。V.5.94）に対応する。それゆえ、「7月16日」ないしその直前に、ヘーゲルは「第三部　完成された宗教」（キリスト教）の結論部分の草稿（Ms）を準備するために、少し前

に書いた「紙片」に立ち返った。そのさいに余白に残りの授業回数を試算した。「7月16日」は必ずしも「紙片」の執筆日として読む必要はないが、その計算を行った日付として、したがってMsの「結末部分の執筆の開始日」(V.3.XXII)として読まれるべきだ、とイエシュケは言う。とは言え、「紙片」そのものの執筆も時間的に接近している。163b頁(GW.17.324)に六月末に刊行されたばかりのシュライエルマッハーの『信仰論』のキーワード、「依存感情(das Abhängigkeitsgefühl)」という語が見られることから、執筆は一八二一年七月初めから中旬の間と推定される(GW.17.364)。それはMsのギリシア、ローマの宗教とキリスト教に対応する素材とテーマを集めてメモした準備草稿だった。以上がイエシュケの考証である。それゆえイエシュケはギリシア、ローマの宗教にかかわる紙片を第二部の巻末に(V.4.643-648)、キリスト教にかかわる紙片を第三部の巻末に(V.5.291-303)に配置した。大全集版では、紙片の頁の順番のままに巻末に(GW.17.305-332)置いた。

イエシュケはヘーゲルが講義終了日を勘違いしていたという可能性に対して消極的である。ところが彼の協力者である英語版の編者ホヂソンは、この可能性にこだわっている。Msに入っている日付によれば、七月二七日から八月八日の間にMs一五枚分が講義された。これに対して、八月八日から八月一七日の間には八枚が講義されたにすぎない。この急なペースダウンは、ヘーゲルが学期終了日が八月二五日であることに遅れて気づき急にほっとしたせいではないか、とホヂソンは推測している(E.3.91.n.88)。筆者はこの推理に触発されて、一八二一年のカレンダーを作成し、これにMsに記された五つの日付を授業の日付と仮定して書き入れて、Msの枚数で講義の「平均速度」を試算してみた(表1)。これを見ると、初年度講義のペースがいかにムラの多いものであったかがわかる。初めは一回平均一枚余のペースだった。ところが「7月16日」頃、残り回数を計算したあとから、急にペースが約二倍にあがっている。この期間に実際に水曜日に補講を行った可能性が高いと私は思う。実際、日付のある八月八日は通常ならば授業のない水曜日である。また最終日八月

二五日は土曜日である。八月一七日からの最後の週は内容の分量から見て、土曜日にも補講を行って、日曜日をのぞく連日の講義で、内容を大急ぎで消化したものと思われる。

いずれにしても、イルティングの見事な謎解きと、イエシュケによるその修正とMsとの内容比較からして、「紙片」はMs後半部の準備段階として一八二一年七月に執筆されたと考えられる。

表1　1821年講義の進行状況

日付　（Msの頁、テーマ）	Msの枚数	授業回数	平均枚数
4／30（2a　序　　論）— 6／	37	35	1.1
6／29（39a　ユダヤ教）— 7／	15	13	1.2
（4／30—— 7／　合計）	52	48	1.1
7／23（54a　ギリシャ宗教）— 7／	4	3	1.3
7／27（59a　ローマの宗教）— 8／	15	7	2.1
（7／23—— 8／　合計）	19	10	1.9
8／8（74a　第3部A　）— 8／	8	6	1.3
8／17（82a　第3部B, C）— 8／25（104a）	22	6	3.7

〔草稿にある日付は6／29、7／23、7／27、8／8 、8／17の5つのみである。ほかに開講日4／30と終了日8／25がわかっている。草稿の日付はたいてい新しい節の冒頭にあることから、そこから始まるテーマを講義した日とみなす。授業は週4回（月、火、木、金）欠けることなく行われたものとして計算した。8／8(水)、8／25（土）は補講日として算入した。〕

B　講義の筆記録（Nachschriften）

聴講生がさまざまな形で「宗教哲学」講義を記録したものは、当時数多く存在したであろう。現在までに二十三の筆記録が知られている。そのうち九つの記録が残っている（表2参照）。マールハイネケが二つの序言であげているノートは残念なことに一つも保存されていない。[16] それでも他の講義にくらべたら、資料状況は恵まれた方である。

筆記録は次の三種の形態に分類できる。

a　Mitschriften（速記録）　講義中のすばやい筆記録。ヘーゲル自身のなまの言葉をそのまま伝えている点で貴重である。反面しかし、ヘーゲルの講

義はお世辞にも「弁舌さわやか」とは言いがたいしろものであったため、〝生録（ナマロク）〟的な筆記はしっかりした文章化という点では欠陥が多い。残っている資料は少ない。例えばPa、Bo。

b Reinschriften（清書稿） 講義後にaにもとづいて自宅できれいに文章化して清書し完成したもの。元々のことば遣いに従い、それを可能な限り再現しようとしたもの。このグループの資料が最も多い。例えばGr、De、Ke、An、Hu。

c Ausarbeitungen（自由に編集された筆記録） 講義後に自宅で、筆記者自身の関心に即して、まったく新しく再構成したもの。しばしばヘーゲル自身の話ぶりに手が加えられている。部分的にはヘーゲル自身の講義より一層よく定式化されている。例えばHo、Cn。

教授の話を遺漏なく記録するため、教室で三人の学生が並んで座り、交代で書きとめ、それを講義後に合成するというやり方は、当時広く行われていた。今日の学生のノートより、ずっと詳細で正確であった。こうしたやり方がヘーゲルの講義でもなされていたかはわからない。ヘーゲルのたどたどしい話ぶりは、逐語的な筆記が比較的やりやすかったかもしれない。しかしこれらの筆記録がたいてい協働して作られたことは残された資料からも明かである。

これらの筆記録はまた売買もされたようである。カントの講義録の筆写は「ケーニヒスベルクではなかなか繁盛した商売」[17]だったことが知られている。ヘーゲルの講義録についても、似たようなことがあった。金持ちの聴講生のハインリッヒ・ベーア（Heinrich Beer 1794—1842 ベルリンの実業家）は講義を自分では書き取らずに、別の聴講生に「記録させていた（nachschreiben ließ）」（HBZ.453）。

筆記録は協働して作られ、出来上がったものは、売買は別にしても、弟子達の間で手から手へと筆写のために渡されていった。ヘーゲル自身がそれを用いたことは、すでに述べた。さらに、ヘーゲルが、筆記録の仲介を頼まれたこともあっ

た。例えば、以前の弟子のラヴェンシュタイン（Ravenstein）や、フランツ・フォン・バーダー（Franz von Bader）からさえも頼まれた（Br.3.250）。前者の依頼に対して、ヘーゲルは自分の権限外のこととして断っている。

「宗教の学についての私の講義のノートの写しを入手したいとの御希望ですが、私にはできかねます。むしろ、学生たちと連絡をおとりになられたら、入手できることでしょう。学生たちの間では、私のあずかり知らぬ所で、そのようなノートが出回っております。たまたま目にした若干のノートからして、必ずしも私はそれに満足してはおりません」（一八二九年五月一〇日、ヘーゲルからラヴェンシュタインへ。Br.3.254f）。

またヘーゲルが筆記録の仲介をしたケースもあった。ゲールト（Peter Gabriel van Ghert 1782－1852）は或る書簡の中で、ヘーゲルの仲介の労に礼を述べるとともに、さらに、「哲学史」「宗教哲学」「人間学と心理学」「自然法」などのノートも入手できたら有り難い、と注文をエスカレートさせている（一八二八年五月二三日、ゲールトからヘーゲルへ。Br.3.233）。

各学期ごとの講義録には次のようなものが知られている。冒頭に筆記者名からとった略記号を入れておく。傍線は現存するものを示す。

1　一八二一年

（He）レオポルト・フォン・ヘニングのノート。第二版で用いられたのちに散失。マールハイネケの第二版序にこうある。「第一版にはほとんど用いられなかった一八二一年の講義について、フォン・ヘニング氏の立派に整理されたノートを利用できた」（W2.11.Ⅷ. 上九）。これが正しいとすれば、バウアーが二版を編集するさいに中心的に依拠した資料の一

（表２）　「宗教哲学」講義に関する資料

各年度の資料 ＼ 版	W 1	W 2	L	V
	1832	1840	1925-9	1983-5
1821年				
宗教に関する紙片〔ハーヴァード〕				*
ヘーゲルの自筆草稿（Ms）〔ベルリン〕	*	*	*	*
ヘニング（He）		* ---------→		
ミシュレ（Mil）				*
シュルツェ（Sc）				
1824年				
グリースハイム（ヘーゲルの書き込み付 Gr 1）	*	* ---------→		
グリースハイム（Gr 2）〔ベルリン〕			*	*
フェルスター（Fo）		*		
ミシュレ（Mi 2）		*		
パステナッチ（Pa）〔ワルシャワ〕			*	*
ダイタース（De）〔私有〕				*
ケーラー（Ke）〔イェーナ〕			*	*
ホトー（Ho）〔ベルリン〕	*	*	*	*
コレヴォン（Cn）〔私有〕				(*)
失われた束（Co）		* ---------→		
1827年				
マイヤー（Me）	*	*		
ドロイゼン（Dr）		*		
筆記者不明（Ak）			* } -→	
エルトマン（Er）			* }	
筆記者不明（An）〔私有〕				*
ベルナー（Bo）〔ワルシャワ〕				*
フベ（Hu）〔クラクフ〕				*
失われた束（Co）		*		
1831年				
カール・ヘーゲル（Hg）	*	* }		
ガイヤー（Ge）		* }		
ライヒェナウ（Re）		* } ---------→		
ルーテンベルク（Ru）		* }		
シュトラウスの概要（St）〔マールバッハ〕				*

Hegel, *Lecture on the philosophy of religion.* ed. by P. C. Hodgson. vol. 1. editorial introduction pp. 22-23. の表をもとに作成。
＊は編集に使用された資料。
〔　〕内は現存する資料の所在を示す。下線は近年の新発見資料。
----→ は特殊資料として新版＝Ｖに編入。

つである。イエシュケは二版からこのノートの部分を抽出し、Msと結びつく位置に脚注として編入した。

（Mi 1）カール・ルートヴィッヒ・ミシュレのノート。散失。ごくわずかな断片が、ミシュレの『カントからヘーゲルまでのドイツにおける最近の哲学体系の歴史』（一八三八年）第二部に間接的に伝えられているだけである。この部分はイエシュケ版（V.5.305）に再録されている。

（Sc）ヨハネス・シュルツェのノート。散失。

ヘーゲルの思想を彼自身の筆から直接知ることができるのは、Msが残っているこの年度についてだけである。反面、講義中での敷衍を伝える学生のノートが全くないため、二版からHeに由来する部分を抽出するしかない。

2　一八二四年

（Gr）カール・グスタフ・フォン・グリースハイムのノート。ベルリンのプロイセン文化財国立図書館所蔵。きれいな字で仕上げられた非常に詳細な清書稿。六四八頁におよぶ浩瀚な記録で、二冊本で綴じられている。速記録Pa、Deとかなりの程度一致することからも、全体として講義をきわめて忠実に再現した記録とみなしうる。一人の学生のものではなく、数人の緊密な共同作業によるものとみられる。マールハイネケが第一版序でこのノートに言及している。

「一八二四年に聴講生が筆記（nachschreiben）したものをヘーゲルと懇意の聴講生の一人フォン・グリースハイム大佐がヘーゲルのためにきれいに書き写させた。そしてこのノートをヘーゲル自身が一八二七年に講壇上で用いて、さらに若干の補正を加えた。それらはたいてい講述のさいに敷衍するために個々の語句や文章に加筆されたものにすぎなかった」（W1.11.VI. 上二）。

現存するノートにはこの補正がないから、ヘーゲル自身が用いマールハイネケが初版で用いたノートそのもの（Gr 1）ではない。おそらく、このノートの写本（Gr 2）で、同じ内容をもつものと推測される。このノートは初版、二版、ラッソン版に採用された。イエシュケが一八二四年講義の全貌を初めて再現できたのも、このノートによるところが大きい。

（Pa）カール・パステナッチのノート。ワルシャワ大学図書館所蔵。二五六頁にわたる非常に詳しい速記録。速い筆で書かれているため大変読みにくい。Gr とくらべてしばしば内容的にいっそう詳しく、ヘーゲルの実際の話ぶりに近いと思われる。完全な文章になっていない所もあり、Gr の文体上のなめらかさはない。第三部の途中（Gr のページでBd.2. 202 に対応する所）で中断。一、二版では用いられなかった。ラッソンは編集の途中でこれをワルシャワから入手し、第二部以降に編入した。イエシュケの新編集の基礎にもなる。

（De）P・F・（またはF・P・）ダイタースのノート。カール・ローレンツ博士の私有。完全で丹念な清書稿。第三部はすでに出版されている（H.-E. Pries : *Der Begriff der Kirche bei Hegel. Eine Untersuchung über den Kirchenbegriff Hegels und seine ontologisch-metaphysischen Voraussetzungen.* Diss. theol. Kiel 1951.）。資料の発見が戦後であったため、旧版のいずれにも用いられていない。

（Ke）F・C・H・フォン・ケーラーのノート。イェーナ大学図書館所蔵。序論と第一部の初めの部分（Gr のページで Bd.1.50. イエシュケ版 3.170 まで）だけを含む不完全な清書稿。Gr と文字通りほぼ完璧に一致している。Gr と Ke の共通の原本があったと推定される。ラッソン版に編入された。

（Ho）ハインリッヒ・グスタフ・ホトーのノート。プロイセン文化財国立図書館所蔵。細部まで仕上げられた改訂稿。表現はほとんどホトー自身によるもので、信頼できる再現ではない。初版、二版、ラッソン版に編入された。ただし、ラッソンは途中から信憑性に疑問を抱き、二巻目からはこれの採用をやめた。彼はこれを初めは「筆記録（Nachschriften）

として序論と第一部で採用したが（L.1-1.316f.）、「自然宗教」の巻では、ホトー自身による「改訂稿（Ausarbeitung）」とみなした（1-2.240）。「精神的個体性の宗教」の巻からは、ついにホトーによる「改作（Überarbeitung）」と呼んで、この採用を中止した（2-1.249, 2-2.236f.）。イエシュケも、信用に欠けるとしてごくわずかな部分を脚注で伝えるにとどめた（後述一〇一頁）。

（Cn）ジュレ・コレヴォンのノート。マリエ・ローゼンルンゲ博士の私有。第一部の途中（V.3.166-218に対応）までの、フランス語による抜粋。『ヘーゲル研究』第一九巻（一九八四年）で初公開（Jules Correvon : Extraits d'un cours de Philosophie de la religion par Hegel en 1824, *Hegel-Studien* Bd. 19, Bonn 1984, S.52-64）。もとの講義から離れて全く自由な編成と表現をとっているため、イエシュケはこれを採用しなかった。

（Mi 2）カール・ルートヴィッヒ・ミシュレのノート。二版の編集に用いられたのちに散失。ごくわずかな断片だけが間接的に伝えられている。事情はMi 1と同じ。

（Fo）フリートリッヒ・フェルスターのノート。マールハイネケが第二版序で編集に用いたノートとしてあげている。その後散失。

この年度の講義には、幸運にもグリースハイムの忠実で最良の記録をはじめとして、五点の資料が現存し、かなり正確に再現することができる。

3　一八二七年

この年度の資料状況は、一八二四年度とは比べものにならないほど悪い。旧版で用いられた資料がすべて失われている

からである。マールハイネケが初版の序で言及しているのは、次の二つである。

（Me）マイヤーの詳細な筆記録。ヘーゲルに献呈され、「それをヘーゲルは一八三一年にもう一度宗教哲学を講義した際に、講壇上で用いた。そしてこれに口述のための新しい概要をつけ加えた」（W1.11.XII. 上二）。

（Dr）グスタフ・ドロイゼンのノート。これも、第二版の改訂に使われたのちに、失われている。

ラッソンが第一次大戦後に編集に着手したとき、すでにMeもDrも失われていた。しかし彼は、幸運にも次の二つの筆記録をケーニヒスベルクの市立図書館で発見した。

（Ak）筆記者不明のノート。「きわめてきれいな清書稿。多くの箇所で第二版ときわめてよく照応するので、当時の編集者ブルーノ・バウアーの手元にあったと想定してみたくなる」とラッソンは報告している（L.1-1.317）。

（Er）ヨハン・エドゥアート・エルトマンのノート。ラッソンによれば、聴講中の速記ながら、Akと語句が驚くほど一致している。欄外に日付が入っていた（L.1-1.318）。

この二つとも、一九四五年の爆撃でケーニヒスベルク図書館が破壊されたときに、失われてしまった。

しかし近年、次の三つのノートが新たに発見された。

（Bo）イグナシー・ベルナーのノート。ワルシャワ大学所蔵。七八頁にわたる完全な速記録だが、集中度にムラがある。非常に読みにくい小さなラテン文字で書かれている。十分に文章化されていない所が多い。若干のパラグラフはただざっと、とびとびに速記されているだけである。しかし、ラッソン版や初版、二版と字句の一致を示している。ヘーゲルが講義した日付が最初から最後までつけられていて、貴重な情報を伝えている。それによると、ヘーゲルは講義の最後の週に、通常は月、火、木、金の四回であるところを、さらに水曜日の八月八日に補講を行っていることがわかる。これらの日付は、ラッソンがErから伝えた日付と基本的に合致し、さらにラッソンの誤解をも訂正する。

（An）筆記者不明のノート。B・ラェベル牧師の私有。非常にきれいに書かれた完全な清書稿。テキスト本文のなかに比較的小さな配置替えが若干あり、欄外にも若干の追補がある。おそらく、同一学期の他の講義録と後から比較して書き加えられたものであろう。テキストは入念に文章化されているが、表現はBoとHuと比べてみると、すでに筆記者自身の思考の跡を残している。

（Hu）ヨーゼフ・フベのノート。クラクフのヤゲウォ図書館所蔵。ラテン文字で書かれた三六五頁におよぶ完全な清書稿。欄外に、同一学期の他の筆記録と比較して加えられた追記が若干ある。フベはポーランド人であるせいか、文体はしばしばぎこちなく、文法的にも欠陥のあるドイツ語である。しかし、内容は豊かである。

これらの新発見資料は、ラッソンが用いた資料には劣るが、旧版からこの年度の講義を再構成するさい、講義の元々の構成を確かめ、旧版を修正・追補する上で大いに助けになった。

4　一八三一年

最終年度の講義を直接伝える記録はすべて失われ、すでにラッソンも一つも利用できなかった。一、二版が共通して用いたのはただ一つ、

（Hg）カール・ヘーゲルのノートである。第一版の序に「息子カールがヘーゲルのために筆記し、ヘーゲル自身が正しいと認めたノート」（W1.11.VII. 上二）とある。

第二版が改訂に用いたのは、次の三つである。

（Ge）ガイヤーのノート。

（Re）ライヒェナウのノート。

（Ru）ルーテンベルクのノート。

この三つは第二版の序のなかで、「はっきりした考えで綴られたノート」（W2.11.Ⅶ. 上九）として挙げられているが、それ以上に詳しいことは不明。

このように資料が皆無の状態であったが、近年、

（St）ダウィット・フリートリッヒ・シュトラウスの摘要が発見されたことによって、資料状況は一変した。このノートはマールバッハのシラー国立博物館に久しく所蔵され、すでにカタログ化されていたものであったが、近年になってやっとボーフムのヘーゲル研究所の眼にとまった。ラッソンはこのノートの存在を知らなかった（E.1.19.n.26）。

シュトラウスは一八三一年の一一月一〇日にはじめてテュービンゲンからベルリンのヘーゲルのもとを訪問したが、その四日後にヘーゲルは急逝した。講義を直接聴く機会を永遠に失ったシュトラウスはしばし茫然とした。だが、気を取り直してなお半年間ベルリンに留まり、聴講生から多くのノートを借り集めて、論理学、哲学史、世界史の哲学、宗教哲学などの講義の抜粋を作った。このテキストも、もっと詳細な講義録から重要な部分を抜粋して作った要約である。原本になった詳細な講義録の筆記者は、原本が伝えられていないためわからない。シュトラウスは或る書簡のなかで、多年にわたるヘーゲルの弟子である法律家がいくつかのノートを写本のために貸してくれた、と書いている（V.3.XXXⅦ）。原本はこの法律家のものかもしれない。講義の全体をカヴァーしているが、きわめて簡潔なまとめになっている。例えば「序論」と「第一部」は一八二七年にはBoの日付によれば一二回分の講義があてられたのに対して、この摘録はほとんど一回分で済む量になっている。「第四章　国家に対する宗教の関係」は、詳細が二版に収録されている（W2,11.256-267. 上二六八－二七九）。分量比で約三割に縮減されている。この章について、Stと二版とを比較してみると、シュトラウスは彼が入手した原本を忠実に要約したのではなく、主要テーマについて自分の言葉と文体でパラフレーズしたことがわか

る。しかし、二版との比較検討の結果、Stは内容をかなり精確に伝えており、全体として信頼のおけるものである、とイェシュケは評価している。これが発見されたことで、実に多くのことがわかった。第二部の宗教史は全く新しい編成を示している。そのためこの摘要の信憑性が疑われさえした。しかしこれを反駁する別の資料がないかぎり、この疑いは許されない。しかもこの新構想の要素は、三一年の他の資料を利用した初版と第二版のなかにとり入れられ、それ以前の構想と融合させられているのが認められる。最終年度の講義の全体的構成を初めて明らかにした点で、計り知れない価値をもつ資料である。[18]

C　間接的に伝えられた資料

もとのテキストは伝えられていないが、他の所で引用され間接的に伝えられているもの。これは上記のMi 1とMi 2のみで、ごくわずかな量である。

もうひとつの形は、初版、二版、ラッソン版に編入されたが、その後なくなった資料。これはかなりの量にのぼる。彼らの編集方針に問題があったとはいえ、彼らの版によってしか今となっては知りえないものがある以上、旧版は新版の編集にとって資料的価値をもつ。イェシュケらは新版編集時に、非常に綿密なテキストクリティークの末に、失われたテキスト部分の抽出に成功した。詳しくは四の5で述べる。

三　旧版の性格

1　初版（一八三二年　W1）

最初のヘーゲル全集は「故人の友人たちの会による完全版」として刊行された（一八三二～一八四五年）。『宗教哲学講義』はそのトップを切って、ヘーゲルの死後わずか半年後に出版された。驚くべきスピードである。死の三日後の一一月一七日には、すでに講義編集の分担が決定されていた（同日付マリー・ヘーゲルからクリスチアーネ・ヘーゲルへの書簡HBZ.483）。「宗教哲学」を受けもったマールハイネケは、この時期ベルリン大学総長の要職にあったにもかかわらず、翌年五月六日にはすでに編者序文に署名している。このすばやい仕事ぶりには、「或る宗教的要求」（V.3.XL）が背景にあった。マールハイネケの追悼演説がそれを示唆している。

「ヘーゲルの精神は、彼の著作のうちに、彼の多くの崇拝者や弟子たちのうちに生きています。そしてそれは消え去ることなく行き続けるでありましょう。……彼は地上の外皮〔肉体〕から解放され、あらゆる感性的な現れから解放されて、……彼の不朽の価値をすでに認めている人々、そして将来ますますもってその価値を認めるであろうすべての人々のなかで神々しく変容することでしょう。〔イエス〕と同じく、……彼もまた今や彼の真の故郷へと帰っていったのです。そして死を経て復活と栄光へと達したのです」（HBZ.474f.）。

マールハイネケは『宗教哲学講義』の刊行に、ヘーゲルの「復活」を期待し、ヘーゲルのすばやい列聖化に貢献しようとした。イエスに対する福音書の関係と似たものがここにはあった。

初版の編集には、二一年のHe、Msはごくわずかしか用いられなかった。主に用いたものは二四年のGr、三一年のHgである。なかでも「最後〔三一年度〕の講義をヘーゲルの精神のもっとも円熟した記録として特に選んで、これに限定す

る」（W2.11.VI. 上一一）という編集方針をとった。他の年度とは構想を異にする初年度の資料をほとんど使わなかったために、初版は二版とラッソン版にくらべて、ずっと同質的で、ヘーゲルの思考の流れを中断するケースがより少ない（E.1.21）。

マールハイネケには初めに一つの迷いがあった。「手元にあるさまざまな筆記録にもとづいて、もしもヘーゲルが生きていたら自ら著述したであろうと思われるような一冊の本を作る」べきか。それとも、「本の形式を断念して、これらのさまざまな講義を臨場感あふれるままにしておく」べきか。「十分な熟慮を重ねた末に」彼は「二つの道」の中道を行くことにした。つまり「本の体裁をとることと、講義を〔ありのままに〕提供するという二つの目的を可能な限り合致させるため、一方で印刷にふさわしくないすべてのものをとりのぞき、他方で、同時に講義を終始思い出させるものを含む本を提供すること」を「自らの課題」とした（W.1.XIV. 上五）。ヘーゲルは同じテーマについていくつかの学期でさまざまな表現で講述したが、マールハイネケはこれらを「互いに接合（ineinander einfügen）して、互いに補い合って完璧なものになるようにし、しかも、同一の章節内に目立った重複がないようにするという困難な仕事」を行ったと述べている（W.1.XV. 上五）。しかし、イエシュケによれば、（これは、現存する資料と比較して徹底したテキストクリティークをやりとげた者にしか語りえないことであるが）マールハイネケは異なる年度の講義録をただ順番に並べてつなげただけで、いくつかの年度の資料から統一したテキストを作るという試みは実際には行わなかった。同一年度内部においても、たとえば二四年については、Grを基本にしつつも、Hoのテキストで置きかえられている所があるが、それは若干の箇所に限定される。さまざまな筆記録を綿密に照合する時間は彼にはなかったし、またその必要性を認めてもいなかったのである（V.3.XLII）。

ヘーゲルの思考の歩みをそこなわずにしかもくり返しを避けることに、彼はもっとも腐心したようである。そのため編

入されずに終わったヘーゲルの詳述も多く、初版は二版やラッソン版にくらべて明らかに内容に乏しい。

初版は学派の分裂がまだ始まっていなかった時期であるため、党派的には中立である。それだけにこの版を基礎に学派の分裂が起こった。「右派」とされるゲッシェルも、「左派」とされるシュトラウスもマルクスも皆この版を同じように用いたのである。

初版の特徴をまとめるとこうなる。

① スピード編集で不十分さを残す。

② 三一年を基本にしている。それと大きく異なる構想をもった二一年の資料を使わなかったため、他の版より同質的である。

③ 重複を避けるために編入されなかった詳述も多く、情報量に乏しい。

④ 党派的には中立的である。

2　第二版（一八四〇年　W2）

シュトラウスの『イエスの生涯』の出版（一八三五―三六年）を契機に学派内の緊張が高まるとともに、『宗教哲学講義』（W1）のなかの両義性・あいまいさが明るみに出た。このあいまいさは編集にも起因するのではないかという疑念が出され、改版がさし迫ったものとなった。マールハイネケへの非難はヘーゲル家からも出された。息子イマヌエル・ヘーゲルは母（ヘーゲル未亡人）への手紙のなかで、マールハイネケによる宗教哲学の扱いはずさんと呼べるしろものです、このことはよく知られているだけに、第二版はさし迫った課題です、と述べている（一八三九年六月一一日）[19]。

当のマールハイネケ自身このことを認めている。第二版序のなかで、初版編集は「非常に急いだ」ために、「なお多く

の補遺と一そう手落ちのない整備とが第二版のために残されてしまった」と述べている（W2.11.V. 上八）。

イマヌエル・ヘーゲルは新版の編集をすべてホトーにやらせたかった。さらに、ホトー自身がそれを申し出なかった場合には、ローゼンクランツに託すことを支持した。この時すでにバウアーの名前が挙がっていたのにである。

「バウアーとローゼンクランツとの間の競争では、私は多くの理由からローゼンクランツを優先したい。バウアーは或る神学的党派に入っています。これは、この仕事そのものにとっても、世間が第二版に寄せる信頼にとっても不利です。哲学者が編集にたずさわらなければなりません。さらにつけ加えれば、バウアーはコチコチの神学者（Stocktheolog）で、思弁的神学以外のものには聴く耳をもちません。この特殊な課題に必要とされるものを上回るもっと自由な教養をもち合わせていません。これに対して、ローゼンクランツはそのような教養をかなりの程度もち合わせているはずです。同時に彼は他の人間や事柄の独自性や個性を捉える上で、類まれな能力をもっています」（一八三九年四月二七日、イマヌエル・ヘーゲルから母への手紙）[20]。

ヘーゲル家から出た反対にもかかわらず、すぐのちにバウアーの方に決まった。これは、バウアーが実際の仕事をすべて受けもつにしても、マールハイネケが第二版にも編集者として名を残したいという意志表明によるものであったらしい（V.3.XLIV）。もしホトーに編集権が与えられたら、第二版からマールハイネケの名前は完全に消えていたであろう。すでに見たように、ホトー自身の筆記録（Ho）はヘーゲル自身の講義をはなれて、彼自身の思想と言葉で野心的に改作されていた。もしホトーが編集したら、バウアー版よりももっと信頼に欠けるテキストになった可能性が高い。

こうして第二版の実質的な編集はバウアーがやることになった。マールハイネケは二版のための序文を書く段になってやっと、バウアーに編集方針を問い合わせているほどである。しかも弟エトガーに向かって、君の兄さんに、どんな方針でどのようにノートを用いて改訂作業をやったかを問い合わせてほしい、と頼んでいる。これには弟も驚いて、「いった

い彼は序言を兄さんの名前で書くつもりなのでしょうか、それとも自分の名前で書くつもりなのでしょうか？」と兄に書き送っている（一八三九年一二月二九日、弟エトガー・バウアーから兄ブルーノへの書簡）[21]。おまけに、バウアーが印刷にまわした原稿そのものが残っているため、二版がマールハイネケの編者序をのぞいて完璧に〝バウアー版〟であることは疑いようがない。用済みになった印刷用原稿をバウアーが組版部門から取り戻したために、これが今なお残っている[22]。当時の習慣からは異例のことであった。バウアーは編集における自分のイニシアチヴを証明するために、原稿の返還をとり決めたのであろうか。それとも、党派性抜きに、学問的良心にのみしたがって編集したことの動かぬ証拠としたかったのであろうか。いずれにしてもこの印刷用原稿は、初版と二版の異同を一目瞭然のものとし、彼の編集の実態を明るみに出している。はじめは弟エトガーに清書稿を仕上げさせるつもりだった。しかしこれは一二頁に達したところで断念された。のこりをブルーノは初版サンプルの欄外に追記や修正を書き込み、手書きの紙片をはさんで指示記号で初版テキストと結びつけるなどして、組版にまわす原稿をととのえた。初版の一部は抹消され手書きのものに置き換えられているが、それがどの資料からのものかについては何も示されていない。二版も初版と同様、序文で全般的に資料に言及しているだけである。バウアーの編集原則はマールハイネケの序文の情報だけでは十分明らかではない。初版と二版とさらに現存する資料とをつき合わせた徹底的な資料分析をやって初めてわかることである。この気の遠くなるような作業をイェシュケは彼の修士論文の基礎の上に、新版編集時にやり抜いたのである[23]。それによって、Ms と二四年と二七年にそれぞれ由来する部分を区別することに成功した。こうしてはじめてバウアーの編集のやり方について確かなことが言えるようになった。

編者の序によれば、二版で新たに編入されたものは二一年の Ms と He である。二四年については Fo、Mi 2、二七年については Dr、三一年については Ge、Re、Ru が挙げられている。最後の講義について三つも資料が挙げられていることから、最後の講義からの資料がとくに広範囲であるかの印象を与えている。だが、これは事実ではない。これらはすでに

初版で使われたノートとの照合に利用されただけである。新しい資料が豊富にとり入れられたのは最後の講義ではなく、最初のものだった。初版が一八三一年講義を基本に据えたのに対して、二版はこれに、これとは異なる構想をもった二一年講義からの新しい資料を接合した。マールハイネケが初版に二一年のMsとHeを編入しなかったのは、時間がなかったせいではない。それらを「一冊の本」に接合するには無理があるという適切な見通しによるものであった。それらが後の講義と合致しない箇所では、ヘーゲル自身の思考の筋道をこわすし、合致する所では、重複になってしまう。それをマールハイネケは避けたかったのだ。これに反してバウアーがMsを編入したのは、すでに『哲学史講義』や『美学講義』の編集がヘーゲルの自筆草稿を編入しはじめていたことにならったためである。しかも、宗教哲学の解釈をめぐって学派の緊張が高まり論争が燃え上がったあとでは、論争に決着をつけるためにも、ヘーゲル自身の遺稿を動員することが何よりも求められていたし、時宜にかなったことでもあった。こうして、二一年のMsが採用されたことで、同年のHeも合わせて編入されることになった（V.3. Lf.）。

バウアーは、一冊の本の体裁をとることと講義のありのままの姿を提供することの中道を行くというマールハイネケの路線を引き継いだ。ところが後期の講義の構成のなかに、構想の異なる初年度講義を強引に編み込んだために、ヘーゲル自身の思考の筋道を引き裂くかなりの緊張を生じさせてしまった。第三部は、構想の変化が比較的小さかったからまだよかった。第一部については、バウアーの統合のプログラムは完全に破綻している。イエシュケの綿密なテキストクリティークの結果によれば、彼はMsを改鼠までして編入している。これは決して正当化されることではない（V.3. L）。

ラッソンは、バウアーは初版を分量的には拡大したが、「この拡張は初版の改善を少しも意味しなかった」と言う。

「たしかにバウアーは、初版にまだ残っていた重複部分を取り除いた。しかし新しい資料を該当箇所によかれあしかれ接合した。これによって、新たなくり返しを持ち込んだだけでなく、連関を不明瞭にし、思想の道筋を見えにくく

してしまった」(L.1-1.319)。

さらに、ラッソンはMsの編集について、「一版、二版とも、よりによってヘーゲルの講義のこの最初の土台を形成する成分を、最高に不幸な形で提供している」(L.1-1.318)と批難する。

「バウアーはとりわけ、ヘーゲルの草稿をきわめて勝手に扱った。彼はそこから引き抜いたものをパラフレーズして置きかえ、パラグラフの元々の順序など顧慮せず、内容の変更すらはばからなかった」(L.1-1.319)。

近年のバウアー赦免の傾向にもかかわらず、ラッソンによるバウアー攻撃はそう不当ではない、とイエシュケはみる(V.3. L)。

それでは二版は左派、右派のどちらに傾いているのか、それとも中立的なのか、という問題はどうであろうか。この問いは、資料の意識的な不正操作についてと、意図せずに生じた版の性格について、という二重の意味合いをもつ。イエシュケはテキストクリティークの結果、意識的な不正操作の疑いを、初版と同様二版についても否定している。この問題は「宗教哲学」の影響史の初期段階の解明ともかかわる。バウアーは一八三九年夏に編集作業に着手し、同年末にはすでに第一巻の印刷が終わりかけていた。翌年三月一五日頃に第二巻の編集作業も終えている。丁度この時期、彼は初期の極右ヘーゲル派的な見解から脱し、他方、まだ無神論への転向をなし遂げる最中(さなか)にあった。つまりバウアー自身の自己了解の時期あるいは、哲学—神学論争のなかで新しい立場をかちとる時期だった。このような時期に、バウアーは全体として非常な誠実さをもって編集に従事した、とイエシュケは評価する(V.3. L ff.)。

一八四〇年三月一五日付の弟エトガー宛の手紙のなかで、バウアーは「宗教哲学」を右側へ引き寄せたというミシュレのサークルからひろめられ「ハンブルク通信」にのった非難に反駁している。

「僕はこの仕事を学派の実践的利害を一切抜きにして(Ohne alles praktische Schulinteresse)、……党派的な共感

も一切抜きにして（Ohne alle partheiische Sympathie）、純粋な理論的な関心のみで最後までやり抜いた。左も右も、もっとも完全な批判的展開も正統派的な語り口もそのまま並べた[24]」。

バウアーが「宗教哲学」の解釈に編集によって影響を及ぼそうとした箇所が一つだけある。キリストの復活についての叙述の脚注に、二一年のヘーゲル自筆草稿からの引用（「これがキリストの復活と昇天である。……人の子が父の右側に座るとき、人間本性のこうした高まりにおいて、その栄誉および神的本性との同一性は最高の仕方で、精神の眼前に立ち現れた」。）を配し、異例にも、「ヘーゲル自身の手で書かれた一八二一年のノートより」と断り書きをしている（W2.12. 300. 下一二七）。これは、彼が資料源を注記した唯一の箇所である。第二巻の編集は四〇年の初めになされたと思われる。この時すでにバウアーは無神論へ転向しかけていた。春になって印刷にまわす前に、復活を肯定的に論じたこの脚注を削除しようと思えばできたのに、これをそのまま残した。この事実は、彼の先の証言がいつわりのないものであることを如実に示している。学派内の対決が鋭さをまし、もう無邪気に編集をする時代はとうに過ぎ去ったというのに、バウアーはまさに争点のテーマに、ここしか付けたことのない典拠まで明示して、ことさら編集的な緻密さのみを世に贈ったのだ。それだけに、新版が「宗教哲学」をめぐる争いに議論によってではなく編集によって決着をつけてくれるだろうという大方の期待をバウアーは失望させた。バウアー版を左右どちらかに引き寄せたり、つきかえしたりする試みは今日にいたるまでくり返されている。この事情ほど、バウアーの無党派的編集作業を証明するものはないであろう（V.3. L.）。

二版の特徴をまとめると次のようになる。

① 後期の講義の構成のなかに構想の異なる初年度講義を強引に編み込んだために、ヘーゲル自身の思考の筋道を引き裂くかなりの緊張を生じさせてしまった。

② 多くの資料で増補されたため、情報量は豊富である。この版に編入後なくなった資料が多いため、高い資料的価

値をもつ。

③　学派の緊張が高まった時期にもかかわらず、無党派的中立を守り抜いた。

3　ラッソン版（一九二五〜二九年　L）

ラッソンはとりわけバウアーに露骨な反感を示し、これを越えるテキスト作成しようとした。しかし彼の試みは結局一、二版（両方あわせてWと略記）と同じ失敗を屋上屋を重ねるようにして拡大したにすぎない。

彼は前二者の編集方針、つまり、構成も内容も異なる別々の講義から「一つの本」を編むという手続きそのものが根本的に間違っているとは思わなかった。編者たちの能力不足からくる欠陥と考えた。

ラッソンはたしかに、ヘーゲルが各年度に「そのつど全く新しい形」で講義したことを認めている（L.1-1.XI）。しかし、「各年度の講義を別々に印刷する」のは将来アカデミー版でも企画されたら可能であろうが、自分の版ではこの方針は採らないとしている。結局、「満足の行く明快な全体像が生じるような形で、各年度のものが互いに結びつけられ編まれなければならない」という編集原則に立つ（L.1-1.320）。これはWの原則と何ら変わらない。とくに第一部では、Msの構成を基本にしながら、それと構想を大きく異にする後の資料を組み込んだために、Wの失敗を一層ひどいものにしてしまった。

ラッソンは彼に与えられた資料の状態と、各年度の構成の異同の大きさが各部でそれぞれ異なることから、それぞれに最もふさわしいと彼が考えた方針をとった。したがって、Lには一貫した原理がない。第一部ではMsを、第二、三部では二四年、二七年のノートを基本テキストにした。

そもそも、ラッソンの編集の時点ですでに大きな資料喪失があった。彼が用いることができた資料は次のものに限ら

れる。

一八二一年　Ms のみ。
一八二四年　Gr、Pa、Ke、Ho。
一八二七年　Ak、Er。
一八三一年　なし。

二一年については、Wが用いたHeはもはやなかった。三一年については、すでに何の資料もなかった。今日、このうち失われたものは二七年のAkとErのみである。反対に近年における三一年のStの発見は、ラッソンの時の資料状況を大巾に改善した。ラッソンは第二部の編集のさい、Wの編成と記述のなかに、彼の手元の資料に見当たらないものがあることから、これに強い疑念を表明している。一九二七年には、Wは「もはや、信頼のおける資料とはけっしてみなしえない」(L.1-2.242)とまで断言している。この断言に彼はすぐあとで不安を抱くようになる。まったく資料的な手がかりを欠く三一年に、ひょっとしてWの根拠になるような講義をヘーゲルがやったかも知れないと思ったのである。わずか数カ月後、第三部の編集者ノート(一九二八年)のなかで彼は、三一年の資料がまったくなく、しかも例の「大きな束」(Co)からマールハイネケやバウアーが何を彼らの版に編入したかを知りえないという状況の中で、Wが伝えるものを捨て去ることはできないと述べた。そこで、手元の資料に対応しない旧版の記述をすべて脚注に入れて、「旧版から何ひとつ失われるものがないように」した(L.2-2.238)。前年には信頼できないと断定した版から、一つもとりこぼしがないように努めたというのだから、ほとんど一八〇度の方針転換だ。

今日われわれは、彼の初めの断定が間違っており、思い直して旧版への評価を保留したことが正解だったと確認できる。この点で三一年のStの発見は決定的な意味をもつ。ラッソンの不安は的中した。ヘーゲルは三一年に第二部の編成を大

きく変更した。Wには三一年の新しい編成がとり入れられ、それ以前のものと融合させられている。編者の勝手な創作ではなかったことが判明した。また、第三部の「父の国」、「子の国」、「霊の国」という区分についても、ラッソンは「手もちのどの資料にも見あたらない」と言っている（L.2-2.239）。だが、これもStに登場する。この点でもラッソンが、「ヘーゲルがこの区分を一八三一年の講義に用いた可能性は排除できない」（同）と留保したのは正解だった。

資料の喪失の大部分はすでにLの前に生じていた。Wで使われた資料でラッソンも利用できたのは、二一年のMs、二四年のGrとHoだけだった。反対にラッソンが新たに利用できた資料は、喪失された資料の穴を埋めるにはとても及ばなかった。二四年度については、KeとPa（第二部以降）を新たに用いたが、そのうちKeはGrとほとんど同一であった。二七年度については、ErとAkがあったが、Wと同じ程度の資料であった。Lの資料的価値はWのそれにはとても及ばないのである。

Lの長所はMsの編集にあった。彼は初めてMsの全体を編集し、どこがMsの部分かを読者に明示した。彼の解読は、イルティングが批判するように（II.754ff.）なお多くの問題点を含んでいるにしても、この点でその先駆的な業績は評価されなければならない。しかしこの長所も、上述の編集原則の誤りから、帳消しにされる。

今日の資料状況がラッソン時より劣るのは、せいぜい二七年講義についてだけである。ラッソンは二七年度について、幸運にもWと同程度の資料（AkとEr）を利用できた。この二つとも今日失われている。近年新たに発見された資料（Bo、An、Hu）もこれにはかなわない。新版編集にとって、Lは二七年度についてだけ資料的価値をもつ。イエシュケはLを二七年講義の要素を抽出しやすいという理由から、彼の編集に利用し、Lの頁数を掲げている（後述四の3）。

マールハイネケ、バウアー、そしてラッソンによる三つの版はいずれも各年度の編成に変更があることに気づきながら

も、結局は「一冊の本」を編もうとした。これが三者に共通する根本的な欠陥である。

4　イルティング版（一九七八年 Il）

イルティング版は上記の三者とは性格を異にする。彼ははじめて各年度ごとの編集を企てた。しかし残念ながら、この企てを完遂する前に彼はこの世を去った。出版されたものは第一巻の一八二一年のMsの編集のみである。したがって、彼の仕事はバウアーやラッソンが手がけたMsの編集のやり直しという以上の資料的意味をもたない。彼はラッソンの解読の誤りを大巾に改善し、いっそう優れたテキストを提供した。イエシュケも「彼の解読は全体としてLよりはるかに信頼のおけるものだ」と認めている。しかし、解読よりもイルティンクの編集方針についてイエシュケの批判は厳しい。多くの問題点が指摘されているが、重要と思われる点に絞って言及したい。[26]

（1）欄外追記のあつかいについて

イルティングは欄外追記がしばしば本文の流れを乱すとして、これを脚注に入れる場合が多い。これに対してイエシュケはこれらの追記は一たん書き上げられたものに時間をおいて後から書き加えられたものというよりも、大部分は下書きの最中での加筆修正であり、本文の文脈の中で読めるものは本文に入れるべきだと判断する。イルティングは欄外追記を脚注に配置することで本文（Haupttext）の統一性を破壊しているとイエシュケは批判する。もしも欄外をすべて脚注にもってくるなら、それも一つの首尾一貫したやり方であろう。ところがイルティングは、この原則を貫かずに、しばしば欄外追記を何の指示もなく本文に入れている。このため、それがもともと本文にあったものか、追記されたものかが読者にはわからなくなっている。

（2）左頁にバウアー版(W2)の対応箇所を配したことについて

すでに述べたように、イルティングは、第二版序でマールハイネケが「大きな束」(Co)は一八二一年のものだと「明言」していると誤解してしまった。この誤解からすべてが始まる。ヘーゲルはしばしばキーワードの羅列だけのようなMsをもとに、講義前にちゃんとした文章にまで仕上げ、その原稿によって講義を行った。だからCoとHeを利用できたW2では、Msの断片的なメモがちゃんとした文章の形になっている。CoとHeが失われた以上、MsはW2によって補完されて読まれるべきだ、とイルティングは考え、左右見開きの対照版を作った。イエシュケは、イルティング版の基本的な造りに次のような疑問を呈し批判している。そもそも左頁のテキストは何であろうか。イルティングはW2に対する徹底したテキストクリティークを怠った。そのために、W2の最大の改訂充実がMsに基づくものであったということを見逃してしまった。左頁の内容の多くの部分は、バウアーによって編集されたMsなのである。バウアー自身による編集の産物をイルティングは、HeやCoによって伝えられたヘーゲルの詳述と誤解したのである。彼の版では広範囲にわたって左頁にバウアーによって編集されたMsが、右頁には彼自身によって編集されたMsが二重に印刷されているのである。

たとえば、I 1.93-108は左頁にほとんどもっぱらバウアーによるMsの編集を含んでいる。これでは結局、Msの省略的断片的なテキストを、左頁のバウアーによる欠陥の多い解読を助けにして読むことになり、何のための草稿の忠実の編集かということになる。

他方、バウアーはMsだけで編集したわけではない。ここにはさまざまな資料が入り込んでいる。例えば、IIの冒頭二頁〜四頁に載せられたW2は、イエシュケのテキスト分析によれば、次のように由来が確定される。

二頁　四　—　七行　バウアーによる編集上の追加
　　八　—　一五行　MsとHeからの構成(二一年)
　　一五　—　一八行　二四年の資料から

一八　―　二七行　Ms（二一年）
二七　―　三二行　He と Co
四頁　一　―　六頁　二四年の資料
六　―　一二頁　三一年の資料
一二　―　一八頁　二四年の資料

イルティングが採用したW2の二頁の五〇行中、二一年講義に属するものはわずか一二行である。これは意味のない実にばかばかしい編集と言わざるをえない。

5　その他の版

以上の諸版の他に、ボラント（一九〇一年）とドゥレース（一九〇五年）の編集による版がある。

G.W.F. *Hegel's Vorlesungen über die Philosophie der Religion.* Hrsg. von G.J.P.J. Bolland. Teil 1. Leiden 1901.

G.W.F. Hegel, *Religionsphilosophie.* Hrsg.von A. Drews. Jena 1905.

両者とも普及せず、ほとんど影響力がなかった。筆者も未見のため、ここでは触れない。

今世紀にもっとも普及したのは、グロックナー版とズールカムプ版であるが、両者とも基本的にはW2の復刻版である。邦訳もこれによっている。

四　イエシュケ版の構成と意義

イエシュケによる新版の特徴は、何といっても四つの学期の講義を自立的に別々に編集し、けっしてそれらを融合して「一冊の本」を作ろうとしなかった点にある。これによって初めて宗教哲学の構想の変遷を資料的にたどることが可能となった。

各年度ごとの講義を見てわかることは、これを融合して一つの本に編むことはそもそも不可能であること、また或る年度を基本にして、他の年度のものを補遺として付加することも不可能であるということである。旧版の編者たちは今日のわれわれ以上に多くの資料を手元にして、年度を追ってヘーゲルの構想に少なからぬ変更が生じていることに気付きながらも、いずれもすべての資料を一つの構想の下に統合しようと試み、そして失敗したのである。この教訓に立って、イエシュケは各年度ごとのテキストを別々に提供する以外に道はのこされていないと判断した。

つぎに宗教哲学の基本をなす三部構成、つまり一　宗教の概念、二　規定された宗教、三　完成された宗教という構成を三巻本の形で実現したことである。旧版はこの三部構成を二巻本に編成した（Ｌは正確に言うと四分冊を二巻本にした）。そして第二部が不釣合いに大きいためにこれを二分して、二つの巻に分属させた。これはけっして、たんに外見的な配置の問題ではない。これによって第二部の構成が破壊され、宗教哲学の基本思想を誤解させる危険さえ生んだからである。第二部はその内部においても本来は三部構成を基本にしていた。

二一、二四、二七年は、

（一）自然宗教（原始宗教、東洋の宗教）

（二）精神的個体性の宗教（ユダヤ教、ギリシア宗教）

（三）合目的性の宗教（ローマ宗教）

三一年は

（一）本源的統一（自然宗教）

（二）宗教的意識の自己内分裂（中国、インドの宗教、ラマ教・仏教）

（三）自由の宗教

A　移行形態（ペルシア、ユダヤ、シリア、エジプトの宗教）

B　ギリシアの宗教

C　ローマの宗教

細かな異同はあるが、第二部が三部構成を基本にしていた点は不思議なほど一貫している。ところが旧版はいずれも、第一篇　自然宗教、第二篇　精神的個体性の宗教（ユダヤ、ギリシア、ローマ）という二分法をとっている。これで行くと、第三部のキリスト教は前二者を止揚する第三のものとして宗教史のなかに位置づけられ、「規定された宗教」からキリスト教へのたえざる上昇という印象を与えることになる。実はこの点に大きな問題がある。講義全体の三部構成、そして第二部の内部も三部構成をとってそれ自体で完結していることから、宗教哲学は一　宗教の概念　二　その概念の歴史的な現象形態すなわち宗教史　三　概念の完全なる実現形態すなわちキリスト教という構成を基本としている。キリスト教は宗教史から切り離され、それ自体、概念の実現形態として絶対的に位置づけられている。相対的な歴史的現象としてではなく、理念の具現として「絶対的宗教」なのである。キリスト教へのこの強引な正当化こそ、ベルリン時代の最大の特徴の一つなのである。旧版は二巻編成をとり、そのために第二部を二つに分割してしまったため、キリスト教が概念が実現される歴史的プロセスの中に引きこまれた印象を与えてしまった。新版は三巻本の形を実現することで、この問題点

を取り除いたのである。

各年度ごとの編集の特徴

1　一八二一年の自筆講義草稿（Ms）の編集

ここでは欄外書き込みの扱いが最大の焦点となる。イルティングとは対照的にイエシュケは可能なかぎり本文のなかに編入しようとした。余白というよりも後から定式化されたテキストそのものの成分だから、というのがその理由である。そのさい、どの部分が欄外からのものかわかるように注記されている。本文の文脈にはまらない文節構想のメモやキーワードのメモ的性格をもつものは、脚注で伝えられる。この版が属する「ヘーゲル講義録」シリーズ全体が、大全集版での講義録の刊行に先立つ研究試行版の性格をもつことから、ここでは可能なかぎりなめらかに読めるテキストを提供することが心がけられている。テキストの理解には不要な抹消部分の再現や、草稿の成立過程がつぶさにわかるような情報の伝達はこの版では避けられ、四年後に同じくイエシュケの編集によって刊行された大全集版の第一七巻に譲られた。

2　一八二四年講義の再現

二四年度については、幸い非常に詳細でよく整理されたグリースハイムの筆記録（Gr）が伝えられている。イエシュケはこれを基本テキスト（Leittext）とした。さらにヘーゲルの講述の言葉をそのまま伝えていると思われる速記録Paや清書稿De、Keを補正用テキスト（Kontrolltext）として採用した。これらをGrと照合し、補い修正する形で、講義の再現に努めた。とりわけPaは最も内容豊かで、ヘーゲルの言葉をほとんどそのまま伝えていると思われる。Paのなかで Grをこえる内容はためらいなくテキストに採用された。PaとDeによる修正箇所はおびただしい数にのぼり第一部だけで

も二千箇所をこすとのことである。Hoも追加テキスト（Ergänzungstext）として採用されている。ただし、Hoはホトー自身の自由な野心的な改作であるため、脚注でのわずかな報告に限定されている。そのなかで最も多いケースは、Hoから旧版に採用されたのち、ヘーゲル「宗教哲学」の根本テーゼにまで祭り上げられた言い回しである。例えば「世界がなければ神は神ではない」（W2.11.194. 上二二一）がそれである。ヘーゲルのもともとの言い方は、おそらく、「有限性の契機がなければ、生命も、主体性も、生ける神もない」（V.3.212）というものであった。ホトーの表現がいかにヘーゲル自身の言葉を離れた大胆な言い換えであるかがわかる。これまでの研究のなかで非常に有名となったテーゼが実はホトーによる改作であったことを明らかにするために、新版はこの箇所に、ホトーの改作ぶりを詳しく伝えている（V.3.212f. 脚注）。Hoが新版で伝えられる場合は、こういうケースが一番多いのである。

3　一八二七年講義の困難な再構成

この年度のテキスト作成は、資料状況からして特別な困難があった。近年An、Bo、Huが発見されたが、旧版（W1、W2、L）で用いられ今に伝えられていない筆記録の質には、どれも達していない。したがって新発見資料をすべて集めても、旧版と比肩しうるテキストは作れないのである。そこで二つの選択肢が考えられる。

α　新発見資料に基づいて以前より見劣りのするテキストを作るか、それとも

β　旧版に立ち返るか

のいずれかである。もしαの道をとったら、研究者は結局、旧版の方に手をのばすことになろう。そこでイエシュケはやむをえずβの道を選ぶことにした。現存する資料を手がかりにして、ラッソン版（L）から一八二七年度の要素を取り出し、もとの順序に戻し、それを編集の基礎にした。なぜW1やW2ではなくLからなのか。その理由は、Wの編者たちは

二七年の資料の他に、二一年のHeと三一年の資料とCoを利用できたし、さらには二七年の記述の中に三一年の詳述を入れこんでいる箇所も多いために、二七年度の要素を同定しにくいという点にある。Lに編入された二七年以外の資料は二一年のMs、二四年のGr、Ho、Keのみである。これらはすべて今日に伝えられているため、

L－（二一年Ms＋二四年Grなど）＝二七年の要素

という引き算が可能となる。イエシュケはLのなかに分散し、ごちゃごちゃに渦巻いているおびただしい小片から苦心の末に二七年度の要素の抽出に成功した。これを基本テキストの代用とし、新発見資料Bo、An、Huと照合して元の順序に置き直し、Lのテキストを補正した。現存資料で裏付けられたものだけで本文を再構成し、裏付けを欠くものを脚注で、（1827?）という記号をつけて伝えるという方針をとった。こうして旧版での資料水準をおとさず、新資料によって二七年のものと裏付けられ本来の順序に構成し直された新しいテキストが作られたのである。

こうして作られたテキストを編者たちはWと徹底的に比較検討し、Wの異なる記述は脚注で伝えた。しかし、Lから抽出されたテキストとWとは、とくに、W1とはよく似ているという。ラッソン自身がすでにこの類縁性に気づき、自分が用いたAkがバウアーがW2で用いたDrと同一の内容をもつものではないかと思った（L.1-1.317）。しかし実際は、LとW1との一致の方が、LとW2との一致よりも強いとのことである。ラッソンがW1ではなくW2との一致を指摘したことは、先行する編集（W）に対するラッソンのテキスト・クリティークの甘さを暴露しているとイエシュケは見る。LとW1とのより強い類縁性から、AkはむしろW1で用いられたMeと親戚関係にあるのではないかとイエシュケは推測する。Meはヘーゲルに献呈され、ヘーゲルはこれを三一年の講義に用い、新たに書き込みを行った。ラッソンが用いたAkはヘーゲル自身の書き込みがないから、同一物ではない。しかし、AkとMeとは共通する第三の資料から作られたものか、ないしは協働作業の産物である可能性が高い（V.3.LXXIV）。Ak、Meともに失われた今、証拠はないが、二つのテキス

ト――Lから抽出された二七年度のテキストとW1との比較が、その想定を支持している、とイエシュケは言う。ということは、Lを基本テキストの代用として再構成された新テキストは、結局は、ヘーゲル自身によって採用されたテキスト（Me）の権威に基づくことになる。一八二七年度テキストの編集は、伝えられた資料状況からして、最も困難な作業であった。しかしながら、気の遠くなるような緻密な作業の積み重ねから、ヘーゲルの講義の原形に可能な限り肉迫することに成功したのである。ここには想像を絶する労苦とともに、テキスト編集の〝快楽〟がある。

4　一八三一年講義のシュトラウスによる要約

最終年度の講義の筆記録はすでにラッソンの編集時からなに一つ残されていなかった。現在伝えられているのはシュトラウスの摘要（St）だけである。非常にコンパクトな要約であるが、イエシュケはこれを例えば二七年講義の対応箇所に脚注で伝えるという道をとらず、三一年の講義の全体の構成を知りうるためにも、あえて分割せずに付録に編入した。

5　その他の特殊資料（Sondergut）の編集

こうして各年度ごとの新しいテキストが作られた。しかしこのままでは、まだWに対して資料的に劣る面を残している。Wが利用したが今に伝えられていない資料の要素（これをイエシュケは特殊資料 Sondergut と呼ぶ）が旧版のなかにとり残されてしまうと、研究者はなおも旧版に手をのばさなくてはならなくなるであろう。旧版に資料的にひけを取らないためには、Wからこの要素を完全にくみ尽くして新版に編入しなければならない。この作業は実に気の遠くなるほど綿密なテキストクリティークを要したと推測される。このようにして抽出された特殊資料の主要なものは次のようなものである。

（1）W2が利用し今に伝えられていない資料のなかでとくに重要なものの一つは、二一年の講義録 He である。バウ

アーは二一年のMsを編入するさい、当時まだ今日のような文献学的な厳密さが求められていなかったため、ヘーゲルの不完全な文章を自由に補って、なめらかな文章に作り変えている。バウアーの編集的介入の跡は、例えば、彼が唯一資料源を注記した箇所（上述九一頁）について、W2.12.300とMsの94b（V.5.67f.）とを比較してみれば一目瞭然である。しかし、バウアー自身による編集的介入を超える範囲でのMsからの逸脱部分は、ヘーゲルが二一年の講義中にMsから離れて自由に敷衍した内容をHeが記録し、それがW2にとり入れられたものと思われる。それは二一年のテキストの脚注で、（He）の記号で伝えられる。

（2）バウアーがはじめて利用したもう一つ重要な資料は「失われた束」Coである。W1になくてW2にある二四、二七年の要素と思われるものは、両年度の準備のためのCoからとられたものと推定される。バウアーはW1をはげしく改竄したのではなく、十分に信頼に足る資料すなわちヘーゲル自筆の草稿と書き込みでW1の記述をおきかえたと思われる。これは当時、他の講義（「歴史哲学」や「美学」など）の編集で採用され始めていた原則に従ったものである。これらの要素は各年度の脚注で伝えられる。

（3）二四年のグリースハイムのノート（Gr）をヘーゲルは二七年の講義で使ってこれに書き込みを行った。Wのなかで Grと連関しながらこれから逸脱している箇所がこれに該当すると思われる。これは二四年のテキストの対応箇所の脚注でNo（ヘーゲルの覚書　Notitz）の記号で伝えられる。これと同じやり方を二七年についてはとれない。ヘーゲルが利用したMeが伝えられていないからである。

（4）W1は三一年講義を基本にしており、二一年の資料の利用はごく限られた範囲に限定される。そこで、

W1－（新たに作成された二四年と二七年のテキストの要素）＋三一年の要素

という引き算が成り立ちうる。三一年度以外のものとして、二一年度のHeと二四年のCoから採用した章句が若干ある。

これらはかなり確実に同定できるという。それらを除いた残りはすべて三一年度講義の要素ということになる。このうち、シュトラウスの摘要（St）で確証しうるのは残念ながらごくわずかである。しかしStはきわめてコンパクトな要約であるから、これで確証しえないものを三一年のものではないと断定はできない。W1のなかで三一年の要素と思われるものは三一年と構成が似ている二七年のテキストの対応箇所に脚注として編入される。

イエシュケらはこのように各版、各資料との綿密な比較検討の末に「特殊資料」を推定ないし確定し、これらをあます所なく新版の脚注に編入し、旧版に対して資料的に見劣りのないものにした。

旧版はどの年度の資料かを注記することなく、各年度の資料をつぎはぎして、「一冊の本」にした。新版の編者たちは、徹底したテキスト分析の末に旧版のほとんどすべての章句についてその資料源をつきとめたのである。驚くべき執念と努力である。このことは同時に、Wの資料的価値を正当に評価し、その資料を本来あるべき所に配置し直したことを意味する。

五　結　語

こうしてわれわれは、現時点で手にしうる最良のテキストを贈られたことになる。各年度の講義の原形（ないしは原形に近いと思われるもの）が別々に再構成されたテキストを検討すると、構成面での大きな変更から、論述の重心の移動やニュアンスの相違に至るまで、大小さまざまな変化が認められる。旧版のようにそれらの変更を無視して「一冊の本」に編むことが土台無理であったことを改めて思い知らされる。これまでの研究は旧版の誤った編集方針によって歪められ、無駄な思弁を費やしてきたきらいがある。「円熟した」と思われるベルリン時代においても、重大な思想的展開があった

のである。個々の章句をそれぞれの発展段階の文脈の中で捉え直して、全体の発展史的見通しが示されなければならない。新版はこれを初めて可能にする土台を提供したのである。

筆者は九一年五月に編者のイエシュケ教授をベルリンのシュライエルマッハー研究所に訪ねた。その折に、「宗教哲学」のその後の資料状況についても尋ねてみた。新版の刊行以後一八二七年の資料が旧ソ連で発見されたが、内容的に新しいものはほとんどなく、テキスト編集作業はほぼ終了したと言える、と教授は語った。そこに、現時点でなしうる最良のテキストを編集しえたという自信をうかがうことができた。今後よほど重要な資料が思いがけなく発見されないかぎり、「宗教哲学」の資料はイエシュケ版によってほぼ出尽くしたといえる。

テキスト編集のあとにテキスト解釈が続く。「宗教哲学」研究はいま新しい出発点に立ったのである。

引用略号

Br *Briefe von und an Hegel*. Hrsg. von J. Hoffmeister. Bd.1-4. Hamburg 1969-1981.

E Hegel, *Lectures on the philosophy of religion*. Ed. by P. C. Hodgson . vol. 1-4. Berkeley 1984-1985.

GW Hegel, Gesammelte Werke.

HBZ *Hegel in Berichten seiner Zeitgenossen*. Hrsg. von G. Nikolin. Hamburg 1970.

Il Hegel, *Religionsphilosophie. Bd.1. Die Vorlesung von 1821*. Hrsg. von K.-H. Ilting. Napoli 1978.

L Hegel, *Vorlesungen über die Philosophie der Religion*. Hrsg. von G. Lasson. Bd. 1-2. Hamburg 1925-1928. Nachdruck 1974

V Hegel, *Vorlesungen über die Philosophie der Religion*. Hrsg. von W. Jaeschke. Bd. 3-5. Hamburg 1983-1985.

W1 Hegel, Werke. Bd.11-12. *Vorlesungen über die Philosophie der Religion*. Hrsg. von P. Marheineke. Berlin 1832.（チュービンゲン大学図書館蔵、コピー使用）

W2 Hegel, Werke. Bd.11-12. *Vorlesungen über die Philosophie der Religion*. Hrsg. von P. Marheineke. 2.Auflage.

Berlin 1840. Nachdruck Stuttgart 1928. (Glockner)　邦訳『改訳　宗教哲学』上、中、下巻、木場深定訳（岩波書店一九八二－一九八四年）

注

（1）カール・ペーリッツ編『カントの形而上学講義』甲斐実道・斎藤義一訳（三修社　一九七一年）三三〇頁。

（2）Kannts Gesammelte Schriften. Bd.28. Berlin 1968. s.301ff.

（3）Hegel, *Nürnberger Schriften*. Hrsg. von J. Hoffmeister. Leipzig 1938. XXⅢ, Fußnote 1.

（4）W. Jaeschke, Paralipomena Hegeliana zur Wirkungsgeschichte Schleiermachers. in *Schleiermacher-Archiv. Bd.1. Internationaler Schleiermacher-Kongreß*. Berlin 1985. s.1159.

（5）a.a.O. s.1160.

（6）一八一七年、宗教改革三百年記念祭に、フーリドリッヒ・ヴィルヘルムⅢ世は「宗教改革の完成」をモットーにルター派と改革派（カルヴァン派）との統合政策を打ち出した。九月二七日の政令は「聖書の精神にもとづいて新しく生まれ変わった福音キリスト教会」へ両派を統合することを提案した。王はこれを強制しないことを約束したが、さまざまな抵抗やあきれつがあって、一八三四年に結局この政策は断念された。シュライエルマッハーは、『福音主義教会の諸原則に基づいて連関的に叙述されたキリスト教信仰』（一八二一－二二年）を書いて、これに神学的基礎を与えようとした。ヘーゲルはこの政策に対して公的には態度を一切明らかにしなかった。しかし、この統合政策はヘーゲルの晩年の宗教・国家思想に重大な影を落としている。これについては稿を改めて論じる必要がある。

（7）この版はドイツのW・イエシュケ、アメリカのP・C・ホヂソン、アルゼンチンのR・フェララの共同編集によるものである。ドイツ語版（一九八三－八五年）、英語版（一九八四－八七年）、スペイン語版（一九八四－八八年）がほぼ同時に刊行された。編集への関与は対等であると巻頭にあるが、イニシアチヴがイエシュケにあり、ドイツ語版の編者も彼であることから、ここでは、「イエシュケ版」、「国際共同編集版」という両様の名称を用いる。

（8）当時の資料と各版との関係などについては、実際に手書きの資料を検討し諸版のテキスト・クリティークを徹底して遂行した者にしか言えないことがほとんどである。ここでは、イエシュケらの編集報告に依拠しているが、煩雑さを避けるため、必ずしも逐一の注記と伝聞調の文体はとらない。イエシュケによる八〇頁におよぶ「編集者序」（V.3.VⅡ－LXXXVⅠ）には、重要な

新情報が満載されている。ホヂソンによる英語版の序文はドイツ版と内容がほとんど重複するが、ドイツ語版には見られない記述や、説明が分かりやすくなっている所がある。さらに各巻に各年度の講義の構造的比較を行った詳細な分析がつけられ、全体で二二八頁におよんでいる。これはドイツ語版にはない英語版の特色である。また大全集版の第一七巻の「編集報告」(GW.17.3 47-368) も参考にした。これらの報告は、わが国の研究で論じられたことのない事実がほとんどであるため、重要な情報はとりこぼしのないよう努めた。

(9) W. Jaeschke, Die Flucht vor dem Begriff. Ein Jahrzehnt Literatur zur Religionsphilosophie (1971-1981). in *Hegel-Studien*. Bd.18. Bonn 1983. s.305.

(10) Hegel, Werke. Bd.18 *Philosophische Propädeutik. Gymnasialreden und Gutachten über den Philosophie-Unterricht*. Hrsg. von K. Rosenkranz. Berlin 1840. s.203-205. Nachdruck Stuttgart 1927. (Glockner) 邦訳『哲学入門』川原栄峰・伴一憲訳(日清堂書店 一九七七年)二四六―二四八頁。

(11) a.a.O. s.XVII. (ローゼンランツの編者序)

(12) H. Schneider, Unveröffentlichte Vorlesungsmanuskripte Hegels. in *Hegel-Studien*. Bd.7. Bonn 1972. s.28-31, 32-46.

(13) a.a.O. s.55, 58-59. (シュナイダーのテキスト解説)

(14) a.a.O. s.58. (同)

(15) Hegel, *Berliner Schriften*. 1818-1831. Hrsg. von J. Hoffmeister. Hamburg 1956. s.743 のベルリン時代の講義一覧表を参照。

(16) 初版と二版で用いられたもののうち、グリースハイムのノート(Gr)とホトーのノート(Ho)が伝えられている。ただし前者は「序言」で言及されているヘーゲルの用いたノート(Gr 1)そのものではない。後者は「序言」で挙げられていない。

(17) カール・ペーリッツ編『カントの形而上学講義』三二二頁。

(18) 現在、筆者はこれを翻訳中である。拙訳「D・F・シュトラウス ヘーゲル『宗教哲学』講義(一八三一年)の摘要」『ヘーゲル研究』第二五号、第二七号、一九九二年

(19) W.F.Becker, Fragen und Quellen zur Geschichte von Hegels Nachlaß: Hegels hinterlassene Schriften im Briefwechsel seines Sohnes Immanuel. in *Zeitschrift für philosophische Forschung*. Bd.35. H.3/4. 1981 s.604.

(20) a.a.O. s.603.

(21) *Briefwechsel zwischen Bruno Bauer und Edgar Bauer während der Jahre 1839-1842 aus Bonn und Berlin.* Charlottenburg 1844 (Nachdruck 1979) s.22f.

(22) この組版原稿の存在は以前から知られていた。R. Heede, Hegel-Bilanz : Hegels Religionsphilosophie als Aufgabe und Problem der Forschung. in *Hegel-Bilanz. Zur Aktualität und Inaktualität der Philosophie Hegels.* Hrsg. von R. Heede und J. Ritter. Frankfurt am Main 1973. s. 51. に言及されている。しかし、これは旧ソ連科学アカデミー（現在のロシア連邦科学アカデミー）の哲学研究所に保管されていたため、全面的に検討する機会が与えられなかった。このコピーがボーフムのヘーゲル研究所に手渡されたことによって、新版の編者たちはこれをつぶさに検討することができた。バウアー版の成り立ちの解明のみならず、編集全体にも大いに役ったはずである。新版の謝辞（V.3.Ⅷ）参照。

(23) このような作業をイエシュケはすでに二〇年以上も前に始めていた。彼の修士論文、*Der Aufbau und die bisherige Editionen von Hegels Vorlesungen über die Philosophie der Religion.* Berlin 1970-1971.（未公刊）は近年の新資料の発見に先立つ先駆的な仕事であった。イルティングもこれに注目し、その正確さに驚いていた（II.763）。

(24) Briefwechsel（Anm.21）s.49f.

(25) 新版はMsを直接編集しているため、イルティング版の資料的価値はすでにない。そのため新版の「編者序」は、イルティング版を取り上げていない。イルティング版の分析は W. Jaeschke, Die Flucht vor dem Begriff.（Anm. 9）s.298-309 に詳しい。また、一九八三年七月カプリ島で開かれた国際ヘーゲル学会で、イルティング版と出来立てのイエシュケ版（第一部のみ）との比較検討が行われた。加藤尚武氏の臨場感あふれる報告「最近のヘーゲル研究事情」（『理想』第六〇五号　一九八三年一〇月）参照。